

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0790 ◆◆◆

24/05/22

【 基本はドル高継続だが、「時間切れ」も否定できず 】

4月29日、1990年4月以来となる一時160円台を示現したドル/円だが、以降は上げ渋りの様相だ。依然として当局の円買い介入警戒も根強く、157円レベルになかなかの重さを感じている。個人的には、いまだドル高基調が続いていると考えるものの、以前にもレポートしたように経験則や日柄の観点からすると、先で取り上げた4月末高値160.22円を更新するのは少しずつ難しくなってきたのかもしれない。ヒョッとすると、ドルは年間高値をすでに達成している可能性についても、頭の片隅にとどめておいて損はなさそうだ。

◎4月160.22円が今年最高値!? 年末に掛けドル安進展には注意

今年のドル/円相場は、ザックリ「年初安で以降は右肩上がり」の展開をたどってきた。実際、今年のドル最安値は取引開始日にあたる1月2日の140.80円で、同高値は先で指摘した4月29日の160.22円。その間のチャートを見るまでもなくデータだけでも、少なくとも年明け以降4月末に掛け、20円近くに及ぶ「右肩上がり」を記録していたことは間違いない。

しかし、そんな右肩上がりのドル高の流れが、日本政府・財務省の実弾介入もあり、そののち寸断・停滞していることは周知のとおり。5月半ば以降の動きをみると、4月末に続き2度目の円買い介入と思しき動きが観測された5月2日早朝(日本時間)のレベル、157円半ばが新たな「シーリング」として意識されている感がある。事実、足もと156円後半からドルの上値が重いのは、そんなシーリングレベルを意識し、買いが鈍るからといった指摘も少なくない。

いずれにしても、5月以降停滞しているドル高の進行を、筆者は基本的に一時的なものと考えている。そして最近の時間調整と思しき動きを経たのちは、先の「シーリングレベル」を超えると同時に、再び160円を試す展開もあると予想しているのだが、ここで問題なのが以前にもレポートしたことがある経験則や日柄の観点だ。以下で説明してみたい。

まずは経験則の観点からすると、ドル/円相場には幾つか面白いパターンが見て取れるのだが、うちひとつが「1月、そして4月にドルは年間の天底をつけることが少なくない」一になる。過去に何度も報じている話なのだが、実際1月に年間の天底をつけたケースは1990年以降昨年までの34年間でなんと15回。そして直近の3年間、つまり2020-23年はすべて1月に年間のドル最安値を示現している。さらにいえば、前述したように今年のドル/円最安値も1月2日の140.80円で、このままいけば4年連続で1月に年間安値を示現する公算が極めて大きいと言えそうだ。

なお、1月同様に4月に年間のドル天底を付けたケースはどの程度あるのかというと、先と同じ1990年以降の34年間では7例ある。1月のおよそ半分で、確度も1月よりは劣りそうだが、決して低くない確率であることだけは確か。4月29日の160.22円が年間高値となっても、経験則的にはまったく不思議はない。

一方、では仮に4月末に記録した160.22円が今年のドル/円最高値だった場合、今後はどういった値動きが予想されるのだろうか。実勢相場が前述した「介入シーリング」157円に接近し高値警戒感の間かれるドル/円に対し、警戒感が薄いクロス円はさらなる高値をトライすることもありそうで、ドル/円は上昇もしないが、下値も堅いという強保ち合いがしばらくのあいだ続く可能性もある。

そうしたなか、年後半にかけては消極的だった米利下げがいよいよ実施されるだけでなく、日本の利上げも予想され、日米金利差縮小からドル/円は本格的な下落へと転じそう。さらに、11月上旬には米大統領選が行われるなかトランプ氏が次期大統領へと復帰、いわゆる「もしトラ」状況に陥ると、金利差に加え政治要因からドル安・円高へと進むことになりかねない。当レターで再三再四レポートしている「ドル安サイクル」の観点、とくに「短期10-15ヵ月サイクル」をもとに、筆者は早ければ年末ぐらい、遅くとも来春までにドル/円が次のサイクルボトムに到達すると予想している。

